第３９回兵庫県高等学校総合文化祭

合　唱　部　門　演　奏　会

２０１５年 １１月 ７日（土）　１１：４５開演

伊丹市立文化会館「いたみホール」大ホール

主催　：　兵庫県・兵庫県教育委員会

共催　：　伊丹市教育委員会

主管　：　兵庫県高等学校文化連盟

開会のことば

1．阪神地区連合合唱団　指揮＝南堀　義光

芦屋学園、県立川西北陵、甲陽学院、市立六甲アイランド、園田学園、県立宝塚北、県立西宮、雲雀丘学園

＜八重山・宮古の三つの島唄＞から　「安里屋ユンタ」　（松下　耕　作曲）

2．県立福崎高校・県立香寺高校　指揮＝大野　純子

夢みたものは　（立原道造　作詩、木下牧子　作曲）

Over Drive　（YUKI　作詞、TAKUYA　作曲）

3．市立飾磨高校　伴奏＝岩井いづみ

いのちの名前　（覚和歌子　作詞、久石　譲　作曲）

storia　（梶浦由記　作詞・作曲）

4．県立姫路南高校　指揮＝中川　明彦　伴奏＝小谷　理子

＜ノスタルジア＞から　「みかんの花咲く丘」　（加藤省吾　作詩、海沼　実　作曲）

言葉にすれば　（安岡　優　作詞、安岡　優・松下　耕　作曲）

5．県立東播磨高校　指揮＝植村　浩之

＜ぜんぶ　ここに＞から　「ぜんぶ」　（さくらももこ　作詩、相澤直人　作曲）

＜７つの子ども歌＞から　「ずいずいずっころばし」　（わらべうた、信長貴富　編曲）

6．県立明石西高校　伴奏＝平林　里沙

＜白き花鳥図＞から　「数珠かけ鳩」　（北原白秋　作詩、多田武彦　作曲）

証　（山村隆太　作詞、阪井一生　作曲）

7．三田松聖高校　指揮＝歳内喜代美　伴奏＝今西　綾香

＜雲は雲のままに流れ＞から　「歩くうた」　（谷川俊太郎　作詩、信長貴富　作曲）

＜新しい歌＞から　「きみ歌えよ」　（谷川俊太郎　作詩、信長貴富　作曲）

8．西播磨地区連合合唱団　指揮＝足立　裕輔　伴奏＝熊野　日香

県立赤穂、賢明女子学院、県立香寺、市立琴丘、市立飾磨、自由ケ丘、県立龍野、市立姫路、県立姫路飾西、県立姫路西、県立姫路東、県立姫路南、県立福崎

＜胸のなかの風景＞から　「あなたの心のなかに」　（工藤直子　作詩、松下　耕　作曲）

信じる　（谷川俊太郎　作詩、松下　耕　作曲）

9．県立芦屋国際中等教育学校　伴奏＝小野　聡子

The Sound Of Music　（O.HammersteinⅡ　作詞、R.Rodgers　作曲）

Dancing Queen　（B.Andersson・B.Ulvaeus・S.Anderson　作詞・作曲）

Mamma Mia　（B.Andersson・B.Ulvaeus・S.Anderson　作詞・作曲）

10．県立西宮高校　指揮＝水野　明美　伴奏＝近藤　彩乃・田中　森馬

愛の芽生え　（湯川れい子　訳詞、A.Menken　作曲）

For the beauty of the earth　（F.S.Pierpoint　作詞、J.Rutter　作曲）

11．芦屋学園高校　伴奏＝福西　雅美

愛唄　（GReeeeN　作詞・作曲）

花は咲く　（岩井俊二　作詞、菅野よう子　作曲）

12. **県立三田西陵高校**　指揮＝隈　寛昭
Amazing Grace　(J.Newton　作詞)
Hail Holy Queen　(Traditional)

13. **県立姫路飾西高校**　指揮＝古河真紀子　伴奏＝飯田　彩季
Rainbow Rain　(喜多形寛丈　作詞・作曲)

14. **東播磨地区連合合唱団**　指揮＝合田　芳弘　伴奏＝好本　若葉
県立明石、県立明石西、県立明石南、県立加古川西、県立加古川東、県立加古川南、県立東播磨
今年　(谷川俊太郎　作詩、松下　耕　作曲)

15. **甲陽学院高校**　指揮＝杉山　恭史
＜いつからか野に立って＞から　「天」　(高見　順　作詩、木下牧子　作曲)
さらに高いみち　(木島　始　作詩、信長貴富　作曲)

16. **自由ケ丘高校・賢明女子学院高校**　指揮＝森　一晃　伴奏＝藤岡佐和子
＜ぜんぶ　ここに＞から　「ぜんぶ」　(さくらももこ　作詩、相澤直人　作曲)
らいおんハート　(野島伸司　作詞、コモリタミノル　作曲)

17. **県立篠山産業高校・県立篠山鳳鳴高校**　指揮＝植田　克己　伴奏＝坂田　和美
アイスクリームの歌　(佐藤義美　作詩、服部公一　作曲)
永遠の花　(貴子ヘルビック　訳詞、J.Rutter　作曲)

18. **県立姫路西高校**　指揮＝中嶋　京子
Here Comes the Sun　(G.Harrison　作詞・作曲)
＜ここから始まる＞から　「ここから始まる」　(みなづきみのり　作詩、北川　昇　作曲)

19. **市立葺合高校**　伴奏＝大原　万弥
A whole new world　(T.Rice　作詞、A.Menken　作曲)
Stronger（What Doesn't Kill You）　(G.Kurstin,J.Elofsson,D.Gamson,A.Temposi　作詞・作曲)

20. **県立八鹿高校**　指揮＝西谷　秀樹　伴奏＝岡本　雅子
ーピアノのための無窮連祷によるー生きる　(谷川俊太郎　作詩、三善　晃　作曲)
It's A Small World　(R.M.Sherman・R.B.Sherman　作詞・作曲)

21. **県立尼崎稲園高校**　指揮＝桑田真理子
＜７つの子ども歌＞から　「あんたがたどこさ」　(わらべうた、信長貴富　編曲)
＜カウボーイ・ポップ＞から　「ヒスイ」　(寺山修司　作詩、信長貴富　編曲)

22. **県立加古川南高校**　伴奏＝好本　若葉
証　(山村隆太　作詞、阪井一生　作曲)

23. **賢明女子学院高校**　指揮＝藤岡佐和子　伴奏＝伊達　朱里
＜少女のまなざし＞から　「わたしと小鳥とすずと」　(金子みすゞ　作詩、石若雅弥　作曲)
歌　(みなづきみのり　作詩、石若雅弥　作曲)

24. 県立加古川東高校・県立加古川西高校　　指揮＝合田　芳弘　　伴奏＝法田　尚子
あお　　（谷川俊太郎　作詩、木下牧子　作曲）
O Magnum Mysterium　　（N.White　作曲）

25. 丹有地区連合合唱団　　指揮＝植田　克己　　伴奏＝歳内喜代美
県立篠山産業、県立篠山鳳鳴、三田松聖、県立三田西陵
プレゼント　　（Saori　作詞、Nakajin　作曲）
今、ここに　　（伊藤玲子　作詩、松下　耕　作曲）

26. 県立赤穂高校　　指揮＝浅井　智恵　　伴奏＝川端　真未
＜ぜんぶ　ここに＞から　「ぜんぶ」　　（さくらももこ　作詩、相澤直人　作曲）
アンパンマンのマーチ　　（やなせたかし　作詞、三木たかし　作曲）
空とぶうさぎ　　（持田美晴　作詞、矢田久子　作曲）

27. 親和女子高校　　指揮＝長岡　朋
＜Missa in discantu＞から　「Gloria」
「Sanctus」　　（C.B.Agnestig　作曲）

28. 市立姫路高校　　指揮＝泉　容子　　伴奏＝竹中　晶菜
storia　　（梶浦由記　作詞・作曲）
＜思い出すために＞から　「思い出すために」　　（寺山修司　作詩、信長貴富　作曲）

29. 県立夢野台高校　　指揮・伴奏＝正門　邦子
Jubilate Deo　　（X.Sarasola　作曲）
Circle of Life　　（松澤　薫　訳詞、E.John　作曲）

30. 県立神戸高校　　指揮＝林　香世　　伴奏＝宮﨑　由奈
＜ノスタルジア＞から　「花」　　（武島羽衣　作詩、滝廉太郎　作曲）
積水ハウスの歌　　（小林亜星　作曲）
＜ノスタルジア＞から　「みかんの花咲く丘」　　（加藤省吾　作詩、海沼　実　作曲）

31. 招待演奏　　豊中混声合唱団（with 豊中少年少女合唱団）

閉会のことば

兵庫県高等学校総合文化祭合唱部門演奏会　招待演奏

出演：豊中混声合唱団・豊中少年少女合唱団

Program

しあわせよカタツムリにのって	（作曲：信長貴富　作詩：やなせたかし）
貝殻のうた	（作曲：伊藤康英　作詩：和合亮一）
縄文連禱 より	（作曲：三善晃　作詩：宗左近）
唱歌の四季より「夕焼小焼」	（作曲：草川信　作詩：中村雨紅　編曲：三善晃）
花は咲く	（作曲：菅野よう子　作詩：岩井俊二　編曲：長谷部雅彦）
木を植える	（作曲：木下牧子　作詩：谷川俊太郎）

Message

本日はこのような素晴らしい集いにお招きいただきありがとうございます。私たち豊中混声合唱団と豊中少年少女合唱団は大阪府の豊中市を拠点に活動する一般合唱団です。ここで少し私たちのことを紹介させていただきます。

豊中混声合唱団は創立 74 年の古くからある合唱団で、現在は、18 歳の大学生から上は皆さんのおじい様おばあ様に近い年代の人まで、幅広い年齢のメンバーが集まって歌っています。世界には様々な合唱曲がありますが、その中でも私たちは特に「日本人による日本語の合唱曲」を大切にしており、作曲家の先生にお願いをして新しい曲を作ってもらう取り組み（委嘱初演）も積極的に行っています。

豊中少年少女合唱団は、2001 年に豊中混声合唱団の姉妹合唱団として生まれた子供たちの合唱団です。今は、小学生から高校生まで、元気いっぱいのメンバーが約 35 名集まっています。"豊混"にはこの"豊少"を卒業したメンバーも多く在籍しています。一般的な合唱団は大人だけ子供だけ、あるいは高校生や大学生だけで歌うことが多いですが、私たちは大人の合唱団と子供の合唱団の垣根を越えて一緒に演奏をしています。今日の後半でその歌を聴いていただきます。

さて、今日は親しみやすい曲から、私たちの得意とするレパートリー、大人と子どもによる合同演奏など、色々な曲を集めました。少し詰め込みすぎたかもしれませんが、大人も子供も皆で一生懸命歌いますので、どうぞ最後までお楽しみください！そして、私たちの演奏が、これからも皆さんが歌い続けるためのエネルギーになれれば幸いです。

Profile

<豊中混声合唱団>

1941 年（昭和 16 年）大阪府豊中市近隣の大学、専門学校生らを中心に結成。「美しく豊かな日本語による深い精神性のある音楽」を「幅広い年齢層が豊かに混じりあって創り出す」ことを音楽方針とし、「伝統の継承」と「新しい音楽の創造」の調和のとれた合唱団を目指している。毎年開催する定期演奏会は 55 回を数える他、全日本合唱コンクールへの参加や地元豊中市での演奏など、様々な場で演奏活動を行っている。（ホームページ URL：http://www.toyokon.jp/）

<豊中少年少女合唱団>

「子どもだからこそ、本物の第一級の合唱作品を歌おう」を合い言葉に、豊中混声の姉妹団体として 2001 年 2 月に結成。豊中を中心に、北摂一帯から集まった小・中・高生、約 35 名で活動している。定期演奏会は 13 回を数え、これまでに千原英喜、寺嶋陸也、徳山美奈子、信長貴富、萩京子、矢田部宏、山岸徹の諸氏への委嘱初演も成功させている。宝塚国際室内合唱コンクールにて金賞、銀賞、関西合唱コンクールにて銀賞、銅賞を受賞している。指揮は西岡茂樹、指導・ピアノは西岡恵子が担当している。
（ホームページ URL：http://homepage1.nifty.com/nishioka/toyo/）

指揮：西岡　茂樹

1955 年兵庫県生まれ。合唱指揮を田中信昭、須賀敬一の両氏に師事。指揮活動の最大の関心は、『世界に誇ることができる日本固有の合唱芸術の創造』にあり、主として現代日本の創作家の意欲的な作品を委嘱初演を含めて取り上げ続けている。現在、豊中混声合唱団、豊中少年少女合唱団、豊中ユース合唱団、関西大学グリークラブ、女声合唱団 Stella などで指揮者を務めている。関西合唱連盟理事、大阪府合唱連盟理事、日本合唱指揮者協会関西支部委員、「音楽樹」会員、奈良産業大学教授。
（ホームページ URL：http://www.nara-su.ac.jp/~nishioka/music.htm）

ピアノ:武知 朋子

京都市立堀川音楽高校、京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。ミュンヘンにて M・シュリューター、カールスルーエにて W・ヤーンの室内楽マスターコース修了。その他ミラノ、ウィーンにおいても研鑽。'95 友愛ドイツ歌曲コンクールにおいて最優秀伴奏者賞受賞。'03トスティ歌曲国際コンクールにおいてトスティ・ピアノ賞受賞。第17回京都芸術祭において最優秀協演賞受賞。 様々なジャンルの音楽家との共演、音楽コンクールにおいて伴奏、創作オペラのヨーロッパ公演などアンサンブルピアニストとして活動。

Notes

しあわせよカタツムリにのって

詩を書いたやなせたかしさんはアンパンマンの作者として有名ですが、第二次世界大戦と当時の飢えの苦しみの経験から、自分の顔を弱った人に食べさせる正義のヒーロー、アンパンマンを生み出したのだと言われています。この詩の中で、やなせさんは、「しあわせよ、あんまり早くくるな」と言います。何故でしょうか。しあわせは早く来てほしいものなのに。やなせさんは、しあわせという意味をとても深く考えているひとなのかもしれません。やなせさんの語るしあわせとは一体どんなことなのでしょうか。熱い涙をこらえながら、いつか会えることを願っている、そのしあわせとは。

貝殻のうた

福島在住の詩人和合亮一さんは、難解な現代詩をたくさん作っています。しかし、東日本大震災と原発事故が彼の故郷を襲い、その作風も大きく変化しました。多くの作品がありますが、ぜひ「詩の礫(つぶて)」は皆さんに読んでいただいたい作品です。「貝殻のうた」は、平易なことばで書かれていますが、その裏に隠されているのは、これまでに経験したことのない絶望的な出来事への強い怒りと深いかなしみです。「あなたに 貝殻を そっと 手のひらに 渡したい そして そっと 悲しみを 私に 渡してほしい」と和合さんは詩に書きました。同時代を生きる私たちは、一体何ができるのでしょうか。

縄文連禱 ※抜粋バージョンで演奏します。

紀元前の 1 万年以上に亘り、日本列島には縄文人たちが繁栄していました。彼らは短い人生(平均寿命は 30 歳、もっと短いという説もある)でしたが、自然と共生し、戦争をせず、高い精神文化を持った若者たちの集団でした。しかし、紀元前数百年頃、大陸から高度な文明を持った人々が大挙して日本列島に渡来し、衝突が起こります。平和に暮らしていた縄文人は、渡来人の前にひとたまりもなく、殺されたり、恭順したりして、滅んでいったと言われています。

作詩の宗さんと作曲の三善さんは、この縄文の悲劇を、文明によって破壊と殺戮が行われた第二次世界大戦とオーバーラップさせて「縄文連禱」を創作されました。人間と人間が殺しあう、人間が人間らしく生きることができない戦争が終わったあと、一体どのようにして人々は生きていけばよいのでしょうか。宗さん、三善さんは、縄文人の世界観の高貴さ、原始の人たちの未来を生み出す力(それは愛でしょうか、夢でしょうか、そして悲しみや祈りかもしれません)に希望を見いだしておられます。「縄文連禱」という題名は、そんな縄文の若者たち、そして、もう戻って来ない人たちに対する、終わりのない祈りという意味なのです。

唱歌の四季より「夕焼小焼」

夕焼小焼は、皆さんもよく知っている曲だと思いますが、縄文連禱を作曲した三善さんが編曲したバージョンで聞いていただきます。この曲の最後にはとても高いソプラノの音があります。こんなに無理した高い音、苦しい音を書かなくてもいいのにな、と三善さんに注文したい気持ちになります。でも、なぜそんな音が必要だったのでしょうか。三善さんはよく高田敏子さんという詩人の作品を合唱曲にしていますが、高田さんの詩のひとつに「夕焼け」という作品があります。その一節に「夕焼けが 火の色に 血の色に 見えることなどありませんように」とあります。私たちにとって美しく見える夕焼けの色は、戦争を経験した三善さん、高田さんにとって、どんな色なのでしょう。

花は咲く

NHK の東日本大震災復興支援ソングとして大変有名な曲です。岩井さんの書いた歌詞には「わたしは何を残しただろう」とあります。それは震災で亡くなった死者たちの言葉であっただろうと思います。作曲の菅野さんは、作詞した岩井俊二さんと相談し、歌詞の一部を「わたしは何を残すだろう」に変更しました。今を生きている私たちは、歌うことで何ができるのでしょうか。何を伝えることができるのでしょうか。

木を植える

人間は文明を持ったために、自然を壊します。人間同士で殺し合いをすることもあります。しかし、人間はまた、壊したものや、失ったものを再生することもできます。木を植えることは、そんな再生の象徴とも言えるでしょう。木を植えることは、わたしたちが根こそぎにしたものつぐなうことであり、生きとし生けるものをむすぶ知恵そして力だ、とこの曲では歌われます。いろんな年代のひとたちが集まって歌うことで、この曲が持つメッセージを強く感じてもらえればと願っています。

3曲目に演奏する「縄文連禱」の全体の歌詞や詩人・作曲者のメッセージを掲載します。参考にご覧ください。

縄文連禱　宗 左近

いま ゆらめいてくる
　宇宙の琥珀
夕映えの奥に
天使の涙よりもきらめいて
吸い込まれてゆく死者たち
縄文の若者たち
この世の果てのむこうの焔の赤さを
誰よりも初めて見たために 曙を貫いて
燃えあがらねばならなかった友だち
この世の闇のなかにあの世の夕焼けの火を
何よりも早く点(つ)けたために
真昼に焼かれねばならなかった透明の青春
わたしたちの瞳のなかから出ていって
どこまでも明るんでゆく光たち ああ

さようなら
きみたち 愛 夜の裏への 流れ星
さようなら
きみたち 夢 時間の外への 流れ星

もう 凝えてくる
宇宙の瑪瑙
夕映えの奥に
天使の涙よりも青ざめて
死んで死なないでいる死者たち
消えた縄文の消えない若者たち
この世の始まりのむこうの生命の赤さを
誰よりも初めて抱いたために 血を噴いて
爆けねばならなかった友だち
この世の闇の中に前の世の銀河の灯りを
何よりも早くつけたために
夜から凍らされねばならなかった氷柱の青春
わたしたちの瞳にまたたきを刻んだまま
どこまでも光ってゆく光たち ああ

さようなら
友だち 悲しみ 永遠の外への 渡り鳥
さようなら
(友だち)祈り 大空の裏への 渡り鳥

おお
君たちが去って行ったあと必ず
夕映えぐるみ 地球は廃墟となる
おお
きみたちに残されたままきっと
闇ぐるみ わたしたち化石となる

それでも 友だち
いつまでも わたしたちの若者たち
廃墟は廃墟として生きてゆくから
化石は化石として生きてゆくから
廃墟の上に虹がたち
化石の上に虹がたち
ああ きみたちの落とした未来の種子の花
　わたしたちの瞳の底の記憶の花
咲かないだろうか 輝かないだろうか

さようならからも さようならして 流れ星
さようならからも さようならして 渡り鳥

ああ いま ゆらめいてくる 宇宙の琥珀
咲かないだろうか 死者の花 それでも
ああ もう 凝えてくる 宇宙の瑪瑙
輝かないだろうか 縄文の花 いつまでも

心から わたしたち 願う
明日の宇宙の黒い眠りのなかででも
おお おお おお

なぜ『縄文連禱』か

宗左近

（初演時プログラムノートより転載）

魚の赤ちゃん。

こう書けば、それだけで、どなたも受けとって下さるものがあります。生きている命の一滴。

人間の赤ちゃん。

こう書けば、それだけで、どなたも受けとって下さるものがあります。生きている天使。

ところが悩ましいことがあるのです。

縄文人。

こう書けば、それだけで、どなたも受けとって下さるものがあるでしょうか。

たぶん、何もありはしないのです。そうだなあ、どこかで聞いたような気はするけれど、まあ、そんなところです。

それなのに、マタイ受難曲、宇宙人、ゴッホといえば、それら日本の外の存在を、日本のみなさんはさまざまによく知っておいでです。不思議ですね。そして、奇妙ですね。

じつは、縄文人は、日本人のみなさんの、とくに東北人のみなさんの直系のルーツなのです。ルーツであるからには、みなさんの未来を新しく展いてゆく根源の力でもあるのです。

それを納得していただくには、しかし多くの手続きが必要です。ここでは、次のことだけを申します。

縄文人は、魚の赤ちゃんであるとともに、人間の赤ちゃんでした。つまり、生きている命の一滴であるとともに、生きている天使でした。そして、縄文人は、宇宙人であるとともに、ゴッホでした。つけ加えます。縄文人は、始原の状態にある宇宙そのものへの、激しい合体の祈りでした。

しかし、紀元前三百年、縄文人は亡ぼされました。弥生人という文明によって。丁度紀元三十数年、キリストが亡ぼされたように、ローマ人という文明によって。

けれど、縄文人は死にはてたのでしょうか。

いいえ、死んでもなお生きているのです。それは、激しい祈りですから。あなたのなかに、生きている命の一滴として、生きている天使として。

今日演奏される『縄文連禱』は、その文明に亡ぼされた縄文人への悲しみの歌です。そして、鎮魂曲です。

みなさんのなかに、「私の魚の赤ちゃんは死んだ、わたしの人間の赤ちゃんは亡びた」という思いを、おもちのかたがおいでではないでしょうか。

そういうかたには、この『縄文連禱』は、バッハの『マタイ受難曲』に近いものとして受けとっていただけるかもしれないのです。

わたし自身、おののきながら、開演を待っています。

≪夏が綴ってきたもの≫

三善 晃

（初演時プログラムノートより転載）

《縄文連祷》の、私のなかでの原点を糊るように辿ってゆくと、昭和二〇年の夏に行き着く。

十二才だった。

その前一年間に集団疎開と東京での空襲体験があった。

その後の一年間に秩序の置換を見た。

「根こそぎ喪失」という言葉がある。アウシュビッツから生還した数少ない人々の一部の症状に当てられた呼称である。

個人の「根」…自分というものが、あらゆる他者ではないという宿命の根拠…それが失われてしまったので、自分とはなにかを問う自分が、もういないのだ。

十二才、私は元気だった。

しばらくして「根」がないことに気付くようになった。

「根」なしのまま、それから何度も夏を迎え、過ごし、送った。

今も、夏が来ると、世界に手掛かりの無かった白い浮遊状態が、皮膚に蘇ってくる。

歌えば一瞬に通り過ぎる言葉。

それらはしかし、作曲する私を、過ごしてきたすべての夏の長さで綴じ込めた。

《廃墟は廃墟として》《化石は化石として》、でも《生きてゆくから》。

（…生きてきた。叫ばないで叫んできた。生きてゆかねばならない。）

このつぶやきを言い終えた後に、詩の最後、三行のパラグラフに辿り着く。

《明日の宇宙の黒い眠りのなかででも》。

もう、それを激しく熱く歌うことはできない。

軽い拍動のなかでの、淡い調性への回帰。

この短い終結部に、「根こそぎ喪失」の原点への遡上がある。

そしてやはり《願う》ことを選んでいる。